

## 第3章

# あれから半年。復興はこれから が本番（新潟県中越地震）

※『月刊石材』2005年5月号（vol.296）

巻頭特集「地震で得たもの、失ったもの——問われる技術とリスク管理」より



2005年4月22日の新潟県長岡市内にある寺院墓地の様子。地震発生時は石塔のほとんどが落下していたが、その後の復旧作業で石塔は元通りに

【新潟県中越地震、2004年10月発生】

2004年10月23日夕方に発生した「新潟県中越地震」でも、墓地・墓石に大きな被害があったが、発生から半年経った2005年4月、墓地、墓石の復旧作業は、どの程度進んでいるのであろうか？

取材したのは、新潟県で仏壇・墓石の販売で大きな実績を上げている(株)吉運堂（本社〃新潟市、吉田竹也社長）の長岡店。震源地に程近い長岡市にあり、1999年にオープン。現在は女性3名を含めて、総勢10人で営業している（2005年4月当時）。

「地震があったとき、私は仕事が休みで自宅におり、夕食の前、孫と一緒に部屋にいました。まずは家族の安全を確認し、その後に職場の状況でした。当時、店内で勤務していた担当者の携帯電話にかけても通じず、連絡がとれたのは地震発生後2時間経過した午後8時ごろでした」

地震直後の様子をこう語ってくれたのは長岡店副店長の田中仁さん。当日は土曜日であったが、店舗はもちろん営業日で、副店長として店舗の安全も非常に気になった。地震発生時は営業時間内であったが、店舗を任せられていたのは営業の太刀川英矢さん。田中副店長が携帯電話で連絡をとろうとした相手だ。

「地震発生時は店内にお客様はなく、事務仕事をしていました。大きな余震も続き、お恥ずかしい話ですが、店内の柱にしがみついています。少し落ち着いてから店内を点検したのを覚えています」（太刀川氏）

店舗での被害は、屋内は展示していた仏壇が1本と、別スペースに展示していた小物や仏具が通路に落下。屋外では灯籠はほとんどが倒壊し、墓石は幸いにも1基だけ、さお石が落下しただけだった。仏壇を48本、墓石を75基を展示している同店では特に地震に対する備えをしていたわけではなかったが、展示品に被害が少なく、そのときに来店者がいなかったのは不幸中の幸いといえる。

翌日の24日、田中副店長は通常より2時間早い朝の6時30分に店舗へ出勤。8時15分にはいつものように全員が出勤したが、その日は半日だけの営業。営業といっても仕事ができる状態ではなく、本社から吉田竹史専務と内藤義博工場長が急ぎよ駆けつけ緊急会議を行った。この段階では、お客様から問い合わせの電話などは特になく、そしてその後も電話による問い合わせはほとんどなかった。

「被災地では、まず家族の安否の確認。そして身の回りの被害状況の把握。避難をしなければならぬケースも

多く、お墓まですぐに気が回らないのが現実ですな」

と田中副店長。お客様がお墓の状況を確認出来ないの  
であれば、「自分たちが」ということで、本震から3日目  
には営業マンが担当エリアごとに、寺院、墓地・墓石の  
被害状況の調査を開始。しかしながら、道路が寸断され  
ている場所も多く、目的地まで通常の何倍もの時間をか  
けて車で回ることとなった。

「調査をするにあたっては、お客様の施工リストが役立  
ちました。お名前、住所、墓地の場所など、日頃からお  
客様の顧客管理をしっかりしておくことです。個人情報報

の問題もありますが、外部に出ないような管理をしつ  
りしておけば、すぐにリスト化でき、調査もスムーズです。  
また車は軽自動車が便利でしたね。細い路地へも入れま  
したし、復旧作業が目的ではなかったので、現状調査で  
あれば小回りが利く車がいいと思います」（田中副店長）  
ある程度の調査が終了し、復旧工事を開始したのが11  
月10日で、雪が積もる年末まで作業は続けられた。同社  
と取り引き関係にある福島、茨城の石材業者に援助をし  
てもらい、多いときは復旧作業部隊が12班に及ぶ場合も  
あった。

吉連堂長岡店の墓石展示場。石塔は1基だけ、灯籠はほとんど倒壊した（2005年4月22日、編集部撮影）



「年末までに約800基  
を仮置きではなく、すべて  
接着剤を使用し、目地は  
コーキングで仕上げて完全  
に復旧。余震も続きました  
し、仮置きでは2度、3度  
の間となり、逆にお客様  
に迷惑をかけるという判断  
です」（田中副店長）

800基の中には地震前  
に同店で施工をしていない



クレーンが入れない場所での復旧作業は予想以上に大変だ



洋型もこの通り。しかし被害は少ないようだ

ものも含まれた。場所によっては復旧工事を一括で請けた墓地もあり、檀家さんの受け付け、確認を取るのに3、4日を費やしたときもあった。石塔のほとんどが落下している状況では、まとめて作業を行ったほうが効率性も上がり、もちろんコストも抑えられるのだ。しかし、発生直後の足の踏み場もないような滅茶苦茶ともいえる墓地で、しかもクレーンが入れない場所もあり、復旧出来る場所から三叉を使用しての復旧作業も多かった。

復旧工事に掛かる見積りを営業マンが統一できるようにと単価表も早期に作成。単価表は作業項目をかなり細

かく明確化したのが、それによってお客様との話もスムーズに運んだ。

「お客様の心のケアにも気を配りました。特に年配の方は『会話』をすることで安心されます。同じ被災者として一人ひとりのお客様を大切にしている気持ち。最終的にはこの気持ちが大切で、それが営業の仕事です」

田中副店長も被災者の一人なのである。相手の気持ちが分かるからこそ、復旧工事にも力が入るのだ。

春になり、雪がとけ、被災地の復旧工事はこれから本格化するといいい、長岡店ではお盆までに5000〜6000基の墓石を完全に復旧させなければならぬという。もちろん、新規契約の営業活動もしなければならぬことから、現在は通常の2倍の忙しさだ。耐震施工に興味をもつお客様、洋型を希望するお客様など地震の影響も多く見られるそうだ。

仏壇の販売も行っている同社ならではの話であるが、地震によって仏壇内の仏具が落下したものの、それを正しく戻せないお客様が多いことから、最近は仏具が正しく配置されているときの写真を仏壇の中に納

めることをお客様にお願いしているという。

地震後の報道で避難された方々が一時帰宅の際に位牌を持ち出す場面が多く放送されたが、同社ではまた、被災され仮設住宅などへ避難されている場合などで、仮の仏壇が必要になった方に対し、1万円で小型の仏壇を提供するなどのサービスも行っている。新潟県は昨年（2004年7月）、豪雨による水害の被害にもあったが、その際には水に浸かった仏壇を無償で預かるといった支援も行った。

吉田竹史専務は、

「口頭からリスク管理をしておかなければならないことを痛感しました。昨年のような天災は滅多にないことではあります。店舗展開をしていく中で、他の店舗で同じような場面に遭遇する可能性はあります。そのときにどうするか。次があったら困りますが、『もしも』のことを考え備えることは大切ですね」

と話してくれた。

